

特集  
終戦75周年  
戦争の記憶

# 亡き父の被爆体験に導かれ あの日広島で起きたことを語り継ぐ

原爆投下から75年がたつこの夏、被爆2世として父の体験を語り継ぐ、区内在住の平山雪野さんにお話を伺いました。

父・眞一さんの遺品整理をしているとき、たまたま見つけた1本のカセットテープ。そこには、父が語ることがなかった1945年8月6日の被爆体験が録音されていました。戦後に生まれた雪野さん。父のカセットテープをきっかけに、原爆や戦争が自分にとって無縁のものでなくなり、戦争の記憶を語り継ぐ活動をするまでに至った思いを話していただきました。

図総務課総務係 (☎5722-9205、☎5722-9409)



## 平山雪野さん プロフィール

1958年、兵庫県生まれ。父の仕事の関係で幼少の頃はアメリカなどで過ごし、1964年から目黒区に在住。2013年に発足した東京被爆2世の会「おりづるの子」に所属し、多くの被爆者の声を伝えている。



▲マラソン大会と一緒に参加するなど、仲の良い親子だった

## 父の証言

僕は今日まで被爆体験をしゃべったことがないし、今後もおそらくその機会はないと思う。生涯1回だけの告白になる。

原爆が落ちた1945年、僕は21歳で、陸軍の歩兵見習い士官で久留米にいた。東京の砲兵工場が足りないので、九州から200名ほどの部隊を輸送しろという命令に従い、東京に行き、8月6日はその帰りだった。12時すぎに広島市の東側の駅、海田市駅で列車が止まってしまった。おかしいなと思ったが、超満員の列車の乗客は皆降りろと降ろされた。翌日までに久留米の部隊に帰れ、という軍隊の命令があったので、広島を抜けて、西側に行けば、列車があるのではないかと思い、歩いて行こうとした。(中略)

火の海の中、なかなか道が歩けないので、何時間かかったか分からない。広島駅のそばまで行ったのが、もう午後2時か3時頃だったと思う。僕は広島町の町には一度も行ったことがないのに、地図はなく、町の様子は知らない。黒い雨も降っていた。にっちもさっちもいなくなっていて、うろろろしていたのが、町の情。負傷者が大勢いたが、助ける者がいない。僕らが編成した部隊は10名もいなかった。それだけの人数で燃え盛る町の中に入り、大勢の負傷者の救出など到底できない。しかし、助けてくれ、という声に反応して、とりあえず水筒の水をあげたり、水をくんできてあげたり、できる限りの救援活動をした。負傷者が水をくれて言った話があるでしょう。負傷者や、やけどをして死にかけている人に水を飲ませたら、すぐ死んでしまう、という話を後から聞いたけれど、当時僕はそんな知識もないから、水を飲ませた。救援に行った人たち、あるいは家族が被爆した人たちの中に、水を与えたことを後悔している人がたくさんいる。でも水を求めて苦しんでいる人たちのために水を与えるをえなかった。(中略)

うろろろしながら見た光景は、やはり悲惨なものだった。負傷している人たちは、自分の命のことも考えられない。皆熱いから、熱さを逃れるために、川へ向かう。階段からぞろぞろ川に降りて行くのだけれど、動けないような負傷者が川に入ったらおぼれるのに決まっている。でも、必死に逃げているだけ、そういうことは考えられない。その川では、上流でおぼれた人の死体がいっぱい流れている。それを見ながら、皆とんどんおぼれていく。(後略)

\*生前、平山眞一さんが語った証言を抜粋したものです

全文は東友会ホームページ(下コード)でご覧になれます



## 偶然見つけたカセットテープに 生々しい父の被爆体験が

父が被爆者であることは知っていました。私と父は仲が良く、何でも話す関係でしたが、どんなふうには被爆したのかは聞いたことがありませんでした。あえて私から聞くこともなかったですね。でも、父は声高に話すことはなかったのですが、戦争は反対、許せないと普段から言っていました。

2009年、父は悪性リンパ腫を発症して入院しました。翌年、ちょうど原爆投下から65年がたった夏に、入院先の看護師さんに促されて被爆体験を話したそうなんです。原爆手帳を持っていたので、看護師さんが興味を持ったのでした。私は頻繁にお見舞いに行っていたのですが、その場には居ませんでした。後になって父から「話したよ」と聞きました。

2011年5月に父が亡くなって数カ月がたち、遺品を整理しているとき、たんすの中から1本のカセットテープを見つけました。何だろうと思って聞いてみたら、病院での父の話が録音されていたんです。何これ、とただただ驚いて、何度も聞き入ってしまった。初めて聞く父の被爆体験でしたが、何度も聞いているうちに、これはかなり貴重な証言ではないだろうかと思うようになりました。

というのは、父は学徒出陣で召集された軍人で、その日、偶然列車で広島を通りかっただけなんです。一度も訪れたことのない、まったく関係もない、広島での、1945年8月6日。降りる予定のなかった広島市の海田市駅で下車させられ、明日までに久留米に戻るようという軍の司令に従うため、被爆直後の凄惨な広島市内をさまよって歩き、広島市の西にある横川駅にたどり着くまでの、10時間ほどの被爆体験なんです。

## 父の足跡をたどるため 広島へ

父の証言に衝撃を受け、生前父から、死後に連絡してほしいと言われていた東友会(東京に住む被爆者の会)に連絡しました。

東友会には、被爆2世の会「おりづるの子」があり、関わるうちに、ニューヨークの国連本部で開かれる日本原水爆被害者団体協議会が派遣した核兵器不拡散条約(NPT)再検討会議への要請代表団の一員に、私も加わることになりました。被爆2世として何が話せるだろうか考えた時に、あのテープに吹き込まれている、父が歩いた道のりを私もたどってみようと思ったのです。



▲父の道のりをたどるため焼け落ちた橋に印をつけた地図を持ち広島へ(地図は広島原爆被災誌より)

広島へは初訪問でしたから、それならば父と同じく迷子になる体験をしてみようと思いましたが、そこにとりあえず足を運ばないと、何があったのか自分で見ないと、自分で苦労して調べないと、勉強しないといけないって思ったんですね。

父が下車した海田市駅から歩き始め、救護列車に乗った横川駅まで、余計な地図を持たずに父が目指した方向、父の証言だけを頼りに歩きました。現地では、「この橋は焼け落ちていたから、ここは通れずに引き返して、こちらの橋を渡ったはずだ」など、当時の父の気持ちになって私も右往左往しながら、西を目指して歩きました。かなり大変で、5時間ほどかかりました。

もちろん、父が見たのはすべてが焼け落ちた焦土で、おびただしい死体の山やひん死で「水をくれ」「助けてくれ」と訴える負傷者のあふれる生き地獄の中を、途方に暮れながら歩いたのだらうと思います。半面、私が見たのは近代的な都市で、元気に行き交う人々。ただ、これだけ大きな町が一瞬で焦土と化す恐ろしさは、実際に歩いてみて感じました。

## ニューヨークで出合った 子どもたちの作品が原動力に

NPT再検討会議の要請代表団の一員として、ニューヨークを訪れたのは、2015年4月のことです。

私たちは、ニューヨークの日本人学校や現地の高校を訪問し、被爆について話をしました。小学校低学年に話をすると聞いたときは、どんな反応があるのか不安だったんですが、子どもたちの前に座って、父の体験を語りました。みんな一生懸命、真剣に聞いてくれて「原爆はどう見えたの」など鋭い質問が寄せられました。小さくても知ろうとする、聞こうとする、子どもなりに理解しようとする姿を見て、やっぱり語っていかなくちゃいけないんだなと思いました。



▲核兵器廃絶の横断幕を持ってニューヨークを行進した雪野さん(左端)

また、別の日本人学校のエンタランスに、子どもたちが作ったジグソーパズルのようなものが飾ってありました。パズルのピースに見えたのはいろいろなメッセージを書いた紙でした。それを見たとき、原爆投下時の広島を一枚の絵に見立てると、そこに居た一人一人ひとりがパズルのピースになっているのではないかと感じました。亡くなったかたは無言のメッセージを残し、生き残って体験を語るかたもいる。当時の映像はないわけですから、その時何が起こったかを語り、伝えることで、一つでも多くピースを埋めることになるのではないかと。2世として何ができる

のか悩んでいた私に、子どもたちの作品がヒントを与えてくれたのです。原爆の悲惨さを語り継ぐという大きなパズルの中で、私はピースを埋める活動をしていこうと思いました。



▲ニューヨークの日本人学校に飾られていたパズルプロジェクトの前で

## 被爆2世として 次世代への語り部となる

多くの被爆者のかたがご高齢ながらもお元気で、ご自身の体験を語られているので、私たち被爆2世の現在の主な役割はそのサポートだと思っています。もちろん個人的には今後、数奇な父の被爆体験も語り継いでいこうと思っています。今後は、「人前では語れないけど、話しておきたい」という被爆者のかたの個別の聞き取りも始めていきたいですね。貴重なお話ですから、残していかないといいません。

父はなぜ被爆体験を語ったテープを残し、何を伝えたかったのだろうかと考えたことがあります。見てきた事実だけを淡々と語る父の肉声から感じたのは、「戦争の行きつくところはこれだ。子どもや一般市民、戦争の責任を負うべきでない人が命を落とし、悲惨な思いをした」ということです。被爆者の声を聞けば聞くほど、父の言葉の重みが増し、二度と被爆者をつくってはならないと思います。



▲30分ほどの父・眞一さんの証言は、一言一言しっかりと語っていた